
B A B Y

菘 紗理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A B Y

【Nコード】

N 3 3 4 1 B

【作者名】

菘 紗理

【あらすじ】

私の母は、母である前に女である。20歳を迎え、短大卒業を目前に控える私に母が突然言ったのは「私、もう一回子育てにチャレンジしてみるわ。」だった。母娘の関係が少しずつ変化しはじめる。

第1話

「そういうことだから。」

それだけ最後に言っていると、母は立ち上がり自分の部屋へと戻っていった。この家に私の部屋はない。私にはまだ頭の整理ができない。これじゃ自分の家に帰ることもできない。

私の母は女である。これは普通のことかもしれないけれど。私の母は一度も結婚したことがない。母は今だ独身だ。

20年前、母は愛した男の子どもを産んだ。たった一人で。母が愛した男がどんな人だったのか、今はどこにいるのか私は知らない。私を知っているのは、母が今もその男を愛しているということだけ。20年前、母はまだ母ではなく、18歳の少女だった。

私は今年で20歳を迎え、現在短大に通っているが、あと2ヶ月で卒業。短大は家から通えない距離ではないが、母の希望もあり、私は家を出た。短大に入ってから一度も家に帰っていないかった。

2年ぶりに実家に帰り、最初に母に言われた言葉が

「私、もう一回子育てにチャレンジしてみるわ。」
だった。そして

「そういうことだから。」

と言い放ち、久しぶりの再会を祝うでも喜ぶでもなく、母は部屋へと戻っていったのである。母の部屋は昔は私の部屋だった。私が出て行くとすぐに母は私の部屋を自分のものへと変えた。

母と私は二部屋しかない狭いアパートで18年間、二人で過ごしてきた。その間、母は何人も男の人をこの家に連れてきた。私が見ている一番最初の母の彼氏は、私が3歳のときの人だ。顔なんかはよく覚えていないけれど、きちつとスーツを着た人だった。その人は私にお菓子やおもちやをなんでも買ってくれた。でも、母は

すぐにその人とは別れた。母は女として、自分よりも自分の子どもを愛する人を許せないと言っていた。あれは私にとってはすごく衝撃的な発言だった。母は私を子どもとしてではなく、恋のライバルとして見ていた。まだ3歳の自分の子どもを。その後も、何人もの人を母は連れてきたけれど、一人として続く人はいなかった。毎回、一つの恋が終わるたびに母は

「私が愛しているのは、やっぱりヒロアキだけだわ。」
と言った。ヒロアキは私の父親だ。母は私にヒロアキが私の父親だと説明したことは一度もなかったが、私にはわかった。母はたくさんの男の人を愛したけれど、本当に愛したのはヒロアキだけだったと毎日必ず寝る前に話していたし、どんな男と付き合っているともヒロアキが一番いい男だってことはわかっているのと毎日必ず朝起きると話していたから。

私はヒロアキを見たことがない。写真もなければ、ヒロアキの持ち物だって一つもなかった。でも、私の中でのヒロアキは完璧にできあがっていた。母がヒロアキを愛するように、私もヒロアキを愛していった。私もやっぱり母の子なんだと知った。

母が惚れた男で、唯一母を捨てたのがヒロアキだってことも、私はやっぱり知っていた。母は毎日ヒロアキを愛していると話すけれど、ヒロアキが今、どこで何をしているのかを母から聞いたことはなかった。母は誰かに恋をしても、常にヒロアキを愛していて、ヒロアキを待っていた。

家には電話もなければ、テレビだってなかった。小学生のころ、私は何度か母になぜ家には電話がないのか聞いたことがある。そのとき母は少し寂しそうな顔をして

「あんだ、電話を信じられるの？」

と私に質問を返してきた。なぜ家にはテレビがないのかという私の質問に対しても母は

「あんたはなんでテレビが必要だと思っの？」

と困った顔で質問を返してきた。思えば、私と母はまともに会話をしたことがないのかもしれない。唯一まともに会話が成立するのは、私がヒロアキについて質問したときだけ。

「ヒロアキってどんな人？」

「あんたにはヒロアキは理解できないわ。」

「春奈さんはヒロアキを愛しているの？」

「愛しているわ。」

Re：第1話

久しぶりに愛香が帰ってきた。まともにあの子の顔が見れなかった。部屋に入ったはいいけれど、そわそわして落ち着かない。あの子になんて説明すればいいんだろうか。もう、今日は考えるのをやめよう。明日また考えればいいんだから。

ベッドの枕元においてある写真を眺めてみる。そこには私と愛香がいる。まだ愛香は小学校の低学年で、ほんの小さな子どもだった。赤いランドセルを背負い、花柄のワンピースにフリフリの靴下を履いている愛香は、ちっともヒロアキになんて似ていなかった。いつ、なんのために、誰がこの写真を撮ってくれたのかは覚えていない。二人とも笑ってなんかいないけれど、とつても綺麗に見えるから、私はこの写真が好きだった。

写真なんて、大嫌いだけど。写真なんて、信じられないけれど。それでも、私はここにいる愛香が好きで、自分が好きだった。

この頃、愛香は何でも私に質問してきた。家に電話やテレビがないことを問い詰められたし、ヒロアキについてもしつこく質問を繰り返してきた。

私は機械が苦手だ。使い方がわからないというだけでなく、なんだか機械に慣れることができなかった。電話で人の声を聞くと、本当にその人に会いたくなってしまうし、テレビを見ていると偽者の人間が映っているようにしか見えなかった。

私は機械が苦手だったけど、ヒロアキは機械が好きだった。ヒロアキは私の持っていないものを持っていて、私はヒロアキの持っていないものを持っていた。

私は、愛香にヒロアキの話をするのが嫌いだ。少し、ヒロアキの話をするると愛香はどんどん想像を膨らまし、どんどん深く追求して

きた。深く追求されれば、されるほど、私はヒロアキのことがわからなくなる。自分がヒロアキのすべてを知らないことに悲しくなる。

私は、たくさんの男の人と付き合ってきた。いろいろな人と付き合った。自分にヒロアキしか愛せないのだと気づかされていった。それでも、私は誰かと一緒にいたかったし、愛されていたかった。愛香は私と違って、人に愛想を振り舞うことが得意なようだった。私がどんな人を連れて行っても、すぐに打ち溶け、私からその人を奪って言った。

私は自分で、自分がわからなかった。けれど、愛香が私以外の人間と親しげに打ち溶けている姿を見ると、無償に腹が立ち、悲しみが押し寄せてきた。愛香は私とヒロアキだけのもので、それ以外の人には触れてほしくなかなかった。でも、愛香は成長するにつれて、どんどん私から離れていった。私などいなくても生きていけるといふような顔をするようになった。

私には、愛香しかいなかった。

愛香は短大に行きたいと言った。私はそれを許した。私は怖かった。ヒロアキの時のように、溺れていき、見放されるのが。

愛香が私のもとを旅だとうとしているのはわかった。だから、私は愛香に一人暮らしをすることを勧めた。溺れる前に、抜け出そうとしたのだ。愛香はその要求をすんなりと受け入れた。

私の体と心はかけ離れている。心では愛香と少しも離れたくない。思わないのに、体は愛香を私から引き離そうとする。

私は、愛香に「離れたくない。」と言って欲しかったのかもかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3341b/>

B A B Y

2010年12月18日17時37分発行